

情動的な自伝的記憶の想起と再構成についての検討

その他のタイトル	Investigation of Recall and Reconstruction of Emotional Autobiographical Memory.
著者	関口 理久子
雑誌名	関西大学心理学研究
巻	7
ページ	7-16
発行年	2016-03
URL	http://hdl.handle.net/10112/10471

情動的な自伝的記憶の想起と再構成についての検討¹⁾

関口 理久子 関西大学社会学部

Investigation of Recall and Reconstruction of Emotional Autobiographical Memory.

Rikuko SEKIGUCHI (Faculty of Sociology, Kansai University)

Abstract

This study was designed to investigate the positive bias and the fading affect bias (FAB) during recall of emotional autobiographical memory, and the differences of these biases among undergraduate students ($N=85$) by the Self-esteem scale, the Psychological well-being scale, the Thinking about life event scale, and the Big Five scale. This study also examined whether reconstruction of emotional autobiographical memory might correlate to false recall and false recognition generated by the DRM paradigm. The result revealed the followings. 1) Difference between positive estimation and negative estimation of negative experience was smaller than that between those of positive experience. 2) Correlation analysis showed that during recall of positive experience, emotional intensity positively correlated to positive estimation, and negatively correlated to negative estimation. 3) Self-esteem and extroversion positively correlated to recall of positive autobiographical memory and emotional estimation of it. 4) False recall ratio and false recognition ratio did not correlate to any measure of reconstruction of emotional autobiographical memory. Taken together, these results suggest that younger adults generally show reconstruction of positive experience from negative one, and that the reconstruction of emotional autobiographical memory and the association memory error by the DRM paradigm do not appear to be equivalent.

Key words: emotional autobiographical memory, positive bias, fading affect bias, DRM paradigm.

キーワード：情動的な自伝的記憶，ポジティブ・バイアス，感情の消失バイアス，DRMパラダイム

自伝的記憶の想起では、肯定的な自己概念を維持するために肯定的な出来事の方が否定的出来事より多く再生されるというポジティブ・バイアス (positive bias) が報告されている (Byre, Hyman, Jr. & Scott, 2001; D'Argenbeau & Van der Linden, 2008; 関口, 2012a)。ポジティブ・バイアスの個人差についての研究からは、自尊感情の高い人と低い人を比較すると、自伝的記憶の主観的想起特性 (再現

感、知覚の詳細さなど) に差が見られ、自尊感情の高い人は肯定的な自伝的記憶が詳細になるが、否定的な自伝的記憶は詳細に想起しないことが示されている (D'Argenbeau & Van der Linden, 2008; 関口, 2012b)。また、自伝的記憶の想起時には感情を伴うことが多いが、快い感情を伴う出来事は、不快な感情を伴う出来事に比べて忘れにくいという感情の消失バイアス (fading affect bias, FAB) があり、FAB

¹⁾ 本研究は、橋本聖花氏の卒業研究 (2014年度関西大学社会学部) のデータを、氏の許可を得て再分析したものである。

は辛い体験に対処することや主観的幸福感の維持に役立つ (Walker, Skowronski & Thompson, 2003), 文化差がなく一般的な人々の傾向であることも示されている (Ritchie, Batteson, Bohned, Crawford, Ferguson, Schrauf, Vogl & Walker, 2015)。また, 自伝的記憶の想起は何のために行うのかという自伝的記憶の機能の観点からの研究では, 自己の連続性や一貫性を支え, 望ましい自己像の維持に役立つという, 自己継続するために想起するという自己機能 (self function), 他者との関係を促進するために想起するという社会的機能 (social function), 過去を参照し現在や未来を方向付けるために想起するという方向付け機能 (directive function) があることが示されている (Bluck, Alea & Rubin, 2005; Bluck & Alea, 2011; 落合・小口, 2013)。以上のような研究から, 私たちは自伝的記憶を想起する際には, 肯定的出来事の方を多く再生するだけでなく, 否定的な感情を伴う不快な出来事を想起する際にその情動価を肯定的感情や自分にとって価値や意味のある記憶へと積極的に再構成している可能性が考えられる。

記憶再生における情報の誤りや歪みの問題については, Loftus & Palmer (1974) の有名な目撃者の証言の実験以来, 多くの研究において検討されてきた (Loftus, 2004)。これらの研究から, 記憶は再構成されやすく, 偽の記憶を植え付けることも可能であることが実験的に明らかにされている (Loftus, 1997)。虚偽記憶 (false memory) とは, 実際に経験していないことについて誤って思い出すことである。実験的に虚偽記憶を生じさせる方法として, DRM パラダイム (Deese-Roediger-McDermott paradigm) が考案され (Deese, 1959; Roediger & McDermott, 1995), 虚偽記憶の現象の報告とともにその発生機序について多くの研究が行われてきた (鍋田・楠見, 2009; Gallo, 2010)。この手続きによる実験では, 特定の単語 (ルアー語, 例えば「希望」) を連想させる単語リスト (リスト語, 例えば「将来」, 「夢」, 「ふくらむ」など) を提示した後に, 単語の再生や再認を行うと, リストに提示されていなかったルアー語を虚再生または虚再認することが知られている。

このような DRM パラダイムによるルアー語の虚再生や虚再認と, 他の虚偽記憶, 例えば自伝的記憶の再構成による虚再生や虚再認との関連については, DRM パラダイムを用いた研究領域ではあまり議論されて来なかった。しかし近年では, すべての虚偽

記憶の発生に共通する過程が存在するのだろうか論じられている (Gallo, 2010; Schacter, 2012)。大学生を対象とした研究 (Platt, Lacey, Iobst & Finkelman, 1998) や虐待の記憶や宇宙人による誘拐の記憶を持つ人を対象とした研究 (Clancy, Schacter, McNally & Pitman, 2000; Clancy, McNally, Schacter, Lenzenweger & Pitman, 2002) などによると, 自伝的記憶の再構成による虚再生や虚再認を起しやすい人は, DRM パラダイムによる虚再生や虚再認を生じやすいという報告がされている。これらの研究の文脈では, 自伝的記憶における虚偽記憶を持ちやすい人は, そもそも記憶力に問題があり, DRM パラダイムによる連想記憶エラーも起しやすいとされている。一方で, 大学生を対象とした研究 (Wilkinson & Hyman, 1998; Ost, Blank, Davies, Jones, Lambert & Salmon, 2013) では, 自伝的記憶における虚偽記憶の再生と DRM パラダイムにおける連想記憶エラーは関連がないと報告されている。また, DRM パラダイムにより連想記憶エラーを起しやすい人は, 記憶力が悪く虚偽記憶を持ちやすい人ではなく, むしろ, 言語的な概念形成の能力のある人であることが報告されている (Hunt & Chittka, 2014)。自伝的記憶の虚偽記憶の再生については, 自伝的記憶の再構成であり, 記憶を効率的に働かせるのに役立つ適応的な認知的過程であると考えられる (Schacter, 2012; Schacter, Guerin & St. Jacques, 2011)。情動的自伝的記憶においてポジティブ・バイアスが見られるということは, 情動的な自伝的記憶において再構成が生じていることであると考えられる。しかし, このような再構成は, 連想記憶エラーと共通の認知過程であるかどうかは明確な結論に達していない (Schacter, Guerin & St. Jacques, 2011; Gallo, 2010)。

本研究の目的は次の二点である。第一に, 情動的な自伝的エピソード記憶を想起する際に, 個人が自伝的記憶を適応的に再構成しているかどうか, すなわちポジティブ・バイアスや FAB を示すかどうかを検討し, また適応的再構成の個人差を自尊感情, 主観的幸福感, 自伝的記憶の機能, 性格特性との関連において検討する。先行研究から, 自尊感情の高さや主観的幸福感の高さが適応的な自伝的記憶への評価に影響すると予測する。また, 自己機能の高さと肯定的な感情を伴う自伝的記憶の想起には関連があると予測する。また, 落合・小口 (2013) では, TALE の下位尺度のうち行動方向付け機能と情緒不

安定性に正の相関が報告されており、本研究でも、肯定的な記憶についての肯定的または否定的評価との関連が予測される。第二に、DRMパラダイムにおける虚再生や虚再認は、一般化や抽象化を促進させ効率的に記憶しようとする認知的能力の高さと関連するが、一方、情動的な記憶の再構成は、肯定的感情や否定的感情の強度と結びつき、その後、その強度を調整する方向で機能し、その結果、自己像の維持や主観的幸福感の維持を可能にする過程であり、連想記憶エラーの生じる過程とは関連が低いという仮説を検討する。

方法

参加者 調査参加者は成人85名(22.3歳, SD4.0), そのうち実験参加者は40名(22.4歳, SD4.6)であった。

質問紙の構成 以下の(1)から(8)で構成された質問紙を用いた。

(1)調査・実験への参加許諾を書面にて提示し、許諾

する場合は署名を求めた。

(2)フェイスシートとして性別・年齢を尋ねた。

(3)肯定的体験(幸せ・嬉しい・楽しい, 以下P体験)または否定的体験(辛い・悲しい・悔しい, 以下N体験)の想起を教示し、想起された自伝的エピソード記憶の記述を求めた。

(4)想起エピソードへの評価 想起エピソードに対して、想起された記憶の情動の程度(degree, 以下D)、他者に話す頻度(frequency, 以下F)、感情強度(emotional intensity, 以下I)、思い出しやすさ(accessibility, 以下A)について、5件法(全く～非常に)により評価を求めた(Table 1)。さらに、経験への肯定的評価(positive estimation, 以下P評価)又は否定的評価(negative estimation, 以下N評価)尺度(関口, 2012)により4件法(全く～非常に)により評価を求めた(Table 2)。

(5)自尊感情尺度(山本・松井・山成, 1982)自尊感情尺度は10項目から構成される。回答形式は、「あてはまらない(1)」から「あてはまる(5)」の5件法で

Table 1 Items of emotional estimation for recalled epsodes.

その経験に対する現在の状態や感情についてお聞きします。当てはまる一つの選択肢(番号)に○をつけてください。		
1	その経験は、今のあなたにとってどのくらい重要ですか 1.全く重要でない 2.あまり重要でない 3.まあまあ重要 4.非常に重要	P
2	その経験が、今のあなたに良い影響を与えている程度はどのくらいですか 1.全く与えていない 2.あまり与えていない 3.まあまあ与えている 4.非常に与えている	P
3	その経験が、今のあなたに悪い影響を与えている程度はどのくらいですか 1.全く与えていない 2.あまり与えていない 3.まあまあ与えている 4.非常に与えている	N
4	その経験を思い出すとつらい気分になりますか 1.全くならない 2.あまりならない 3.まあまあなる 4.非常になる	N
5	その経験を思い出すと良い気分になりますか 1.全くならない 2.あまりならない 3.まあまあなる 4.非常になる	N(R)
6	その経験を思い出すと自分のことを誇りに思いますか 1.全く思わない 2.あまり思わない 3.まあまあ思う 4.非常に思う	P

Note: P, positive estimation; N, negative estimation; (R), reversed item

Table 2 Items of various estimation for recalled epsodes.

その体験をした時点の気持ちを思い出して以下の質問にお答えください。当てはまる一つの選択肢(番号)に○をつけてください。		
1	その経験はどの程度幸せと感じましたか*	D
2	その経験はどの程度嬉しいと感じましたか*	D
3	その経験はどの程度楽しいと感じましたか*	D
4	この出来事のことをよく考えたり、他の人によく話したりしている	F
5	この出来事に関する私の感情はとても強烈である	I
6	この記憶は、思い出すのが簡単だった	A

Note: *否定的な記憶の場合は、下線部がそれぞれ「辛い」、「悲しい」、「悔しい」. D, degree, F, frequency, I, emotional intensity, A, accesability.

ある。本研究における下位尺度の Cronbach の α 係数は .87 であった。

(6) 心理的 Well-being 尺度 (西田, 2000) 心理的 Well-being 尺度は, Ryff (1989) の心理的 Well-being の概念に基づいて作成された尺度であり, 人格的成長 (personal growth), 人生における目的 (purpose in life), 自律性 (autonomy), 自己受容 (self-acceptance), 環境制御力 (environmental mastery), 積極的な他者関係 (positive relationships with others) の 6 下位尺度 43 項目から構成される。回答形式は「まったくあてはまらない(1)」から「非常にあてはまる(6)」の 6 件法である。本研究における下位尺度の Cronbach の α 係数は, 人格的成長は .81, 人生における目的は .87, 自律性は .67, 自己受容は .83, 環境制御力は .80, 積極的な他者関係は .83 であった。

(7) 日本語版 TALE 尺度 (落合・小口, 2013) 日本語版 TALE 尺度は, Bluck & Alea (2011) の作成した Thinking About Life Experience1 (TALE) 尺度の日本語版であり, 行動方向付け機能 (directive function), 自己継続機能 (self function), 社会的結合機能 (social function) の 3 下位尺度 8 項目から構成される。回答形式は, 「ほとんどしない(1)」から「非常に頻繁にする(5)」の 5 件法である。本研究にお

ける下位尺度の Cronbach の α 係数は, 行動方向付け機能は .61, 自己継続機能は .82, 社会的結合機能 .76 であった。

(8) Big Five 尺度短縮版 (並川・谷・脇田・熊谷・中根・野口, 2012) Big Five 尺度短縮版は, 和田 (1996) の Big Five 尺度の短縮版であり, 回答形式は「全くあてはまらない(1)」から「非常にあてはまる(7)」の 7 件法である。この尺度より外向性 (5 項目) と情緒不安定性 (5 項目) の 10 項目を用いた。本研究における下位尺度の Cronbach の α 係数は, 外向性は .88, 情緒不安定性は .84 であった。

実験課題 DRM パラダイム (宮地・山, 2002) を用いた。実験には, 宮地・山 (2002) の用いた刺激語セットのうち, 虚再生率が高いリストと低いリストから, ターゲット語が肯定的な意味のものと否定的な意味のものを各 2 セットずつ選び, 計 8 セットの刺激語リストを用いた (Table 3)。単語リストセットは 15 個の単語から構成され, 各音声刺激提示の間隔は 2 秒とした。セット提示の順序は参加者ごとにカウンタバランスされた。セット提示直後に, まず自由再生を行い, その後再認を行った。再認に際しては, 各セットにおいてターゲット語を加えた 16 個の単語リストを提示した。

Table 3 Word list sets of DRM paradigm.

虚再生率が高い単語リストセット				虚再生率が低い単語リストセット			
Lure word							
希望 (P)	平和 (P)	痛い (N)	自殺 (N)	改良 (P)	選挙 (P)	汚い (N)	災害 (N)
Word list sets							
将来	鳩	傷	死	機械	公明	どぶ	火事
希望*	戦争	腹	他殺	改良*	投票	便所	台風
夢	広島	かゆい	未遂	農業	参議院	ごみ	保険
大きい	世界	棘	鉄道	よくなる	違反	きれい	遭う
未来	愛	苦痛	死ぬ	品種	演説	ごみ箱	事故
大志	平和*	つねる	失恋	発明	選挙*	手	水害
望み	憲法	切る	睡眠薬	改悪	汚職	美しい	火災
明るい	緑	血	絶望	品質	金	水	運命
光	国連	手術	首つり	土地	うるさい	泥	危険
ふくらむ	のどか	痛い*	殺人	工夫	不正	汚い*	不幸
素晴らしい	安全	けが	青年	進歩	買収	川	困る
高い	望む	刺す	卑怯	改善	当選	不潔	天災
楽しい	自由	注射	心中	改正	ポスター	汚物	受ける
失望	日本	頭	自殺*	必要	選ぶ	下水	災害*
理想	穏か	病気	ガス	改革	候補者	ぞうきん	災難
人生	長崎	つらい	飛びこみ	発展	公正	汚れ	災い

Note: P, positive word; N, negative word; *, the position of the list in recognition test.

手続き 調査と実験の二段階で行われた。まずすべての調査参加者に対して、書面にて調査の目的等を説明し許諾書への署名により参加の許諾を求め、許諾した参加者のみ自由意思により質問紙に回答した。次に、調査参加者の中から同様にして実験への参加を求め、許諾した参加者のみ自由意思により実験に参加した。実験は個別で行われた。

結果

データ分析方法 情動的な自伝的記憶の想起と評価についての分析は、質問紙により得られたデータについて以下(1)と(2)の分析を行った。DRM パラダイムによる実験により得られたデータについては、(1)から(4)の分析を行った。(1) P 体験と N 体験の評価尺度得点について、情動エピソード(2)×評価(2)の 2 要因の分散分析を行った。独立変数は参加者内変数であった。多重比較は HSD 検定により行った。(2) P 体験、N 体験および D、F、EI、A と各尺度得点との相関分析を行い、ピアソンの積率相関係数を算出した。(3)刺激セットごとに正再生回数、正再認回数、虚再生の有無を算出し、8セットについて、正再生率、虚再生率、正再認率、虚再認率を算出した。(4) P 体験、N 体験および D、F、EI、A と各比率の逆正弦変換した値との相関分析を行い、ピアソンの積率相関係数を算出した。

情動的自伝的記憶の想起 分散分析の結果、情動エピソードの主効果、評価の主効果、および、情動エピソード×評価の交互作用が有意であった（それぞれ $F(1, 84) = 30.74, \eta_p^2 = .26, p < .001$; $F(1, 84) = 50.82, \eta_p^2 = .38, p < .001$; $F(1, 84) = 156.32, \eta_p^2 = .65, p < .001$ ）。交互作用の単純主効果の結果、P 評価における体験の効果、N 評価における体験の効果、P 体験における評価の効果、N 体験における評価の効果のすべてが有意であった（それぞれ $F(1, 168) = 42.57, \eta_p^2 = .20$; $F(1, 168) = 176.61, \eta_p^2 = .51$; $F(1, 168) = 192.37, \eta_p^2 = .53$; $F(1, 168) = 14.10, \eta_p^2 = .08, ps < .001$ ）。交互作用の結果をまとめると、P 体験では P 評価、N 体験では N 評価がそれぞれ高いが、P 体験の評価の差に比べ、N 体験では評価の差が小さく、N 体験における評価の効果の単純主効果の効果量が小さいことからそれは示されている (Figure 1)。相関分析の結果、.30 以上の相関が認められたものをまとめると以下のようになった (Table 4)。まず、P 体験と N 体験への

P 評価および N 評価と他の測度との相関分析をまとめると、P 体験では、P 評価と I の間に正の相関、N 評価と F、I、A と負の相関が認められた。各尺度との相関では、P 体験の P 評価では、自尊感情、外向性、心理的 well-being の他者との肯定的関係に正の相関が認められ、N 評価では、心理的 well-being の人格的成長、人生の目的、他者との肯定的関係とに負の相関が認められた。次に、N 体験では、P 評価と F に正の相関が認められた。各尺度との相関では、P 評価と TALE 尺度の自己継続機能の間に正の相関が認められた。N 評価は相関が認められなかった。次に、P 体験や N 体験の D、F、I、A と他の尺度との相関をまとめると、P 体験では、D と心理的 well-being の他者との肯定的関係、F と外向性、A と心理的 well-being の他者との肯定的関係とに正の相関が認められた (Table 5)。N 体験では、A と TALE 尺度の方向付け機能とに正の相関が認められた。

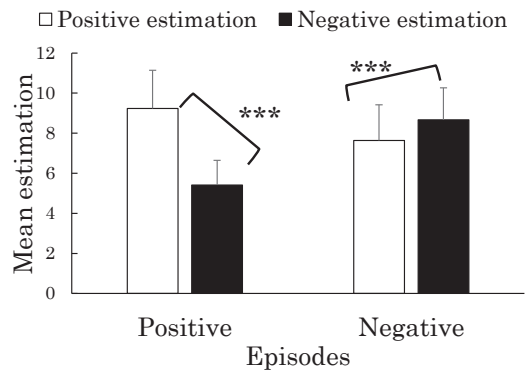


Figure 1. Positive and negative evaluation for episodes (***: $p < .001$; $N=85$).

DRM パラダイムによる実験 分散分析の結果、情動エピソードの主効果、評価の主効果、および、情動エピソード×評価の交互作用が有意であった（それぞれ $F(1, 39) = 25.66, \eta_p^2 = .26, p < .001$; $F(1, 39) = 53.87, \eta_p^2 = .38, p < .001$; $F(1, 39) = 91.20, \eta_p^2 = .65, p < .001$ ）。交互作用の単純主効果の結果、P 評価における体験の効果、N 評価における体験の効果、P 体験における評価の効果、N 体験における評価の効果は有意傾向であった（それぞれ $F(1, 78) = 23.32, \eta_p^2 = .23$; $F(1, 78) = 114.83, \eta_p^2 = .60$; $F(1, 78) = 143.71, \eta_p^2 = .65, ps < .001$; $F(1, 78) = 3.84, \eta_p^2 = .05, p < .06$ ）。交互作用の結果をまとめると、P 体験では P 評価、

Table 4 Correlation between emotional estimation of recalled episodes and othe measures.

	Positive experience		Negative experience	
	P	N	P	N
Positive experience				
Degree(D)	.269*	-.267*	.042	-.049
Frequency(F)	.196	-.310**	.240*	-.048
Emotional intensity(I)	.531***	-.306**	.210	.093
Accesability(A)	.185	-.335**	.154	-.002
Negative experience				
Degree(D)	.037	.021	.040	.235*
Frequency(F)	.043	.198	.473**	-.121
Emotional intensity(I)	.097	-.078	.234*	.212
Accesability(A)	.030	-.092	.238*	.072
The Rosenberg Self-esteem scale	.383***	-.281**	.085	-.178
Big five scale				
Neuroticism	-.248*	.102	.009	.136
Extraversions	.317**	-.281**	.150	-.141
The Thinking about Life Experience scale(TALE)				
Directive function	-.042	.029	.288**	.044
Self function	-.016	-.169	.304**	.011
Social function	.204	-.044	.108	-.027
Psychological Well-being				
Personal growth	.177	-.392**	.173	-.059
Purpose in life	.251*	-.362**	.161	-.231*
Autonomy	.047	-.110	.113	-.114
Self acceptance	.234*	-.239*	-.027	-.282**
Environmental mastery	.260*	-.281**	.071	-.128
Positive relationships with others	.300**	-.440**	.077	-.054

Note: N=85; *** $p < .001$; ** $p < .01$; * $p < .05$.

Table 5 Correlation between emotional estimation of recalled episodes and other measures.

	Positive experience				Negative experience			
	D	F	I	A	D	F	I	A
The Rosenberg Self-esteem scale	.195	.170	.135	.138	-.182	-.040	-.126	.011
Big five scale								
Neuroticism	-.177	-.040	-.079	-.037	.159	-.053	.262*	.128
Extraversions	.338**	.415***	.198	.231*	-.021	.009	-.104	-.014
The Thinking about Life Experience scale(TALE)								
Directive function	.002	.033	.131	.136	.104	.273*	.235*	.320**
Self function	-.028	-.015	.076	.059	.127	.111	.205	.278*
Social function	.132	.123	.084	.191	.104	.131	.080	.125
Psychological Well-being								
Personal growth	.165	.079	.278*	.271*	.072	.149	.097	.202
Purpose in life	.255*	.163	.255*	.199	-.045	.032	.039	.098
Autonomy	-.075	.048	.062	-.047	-.159	.076	-.089	-.079
Self acceptance	.160	.040	.014	.117	-.189	.035	-.220*	-.172
Environmental mastery	.135	.107	.171	.266*	.017	.195	-.076	.060
Positive relationships with others	.344**	.110	.208	.409**	.184	.120	.055	.092

Note: N=85; *** $p < .001$; ** $p < .01$; * $p < .05$.

N 体験では N 評価がそれぞれ高いが、P 体験では P 評価と N 評価に差が見られるが、N 体験では差が見られなかった (Figure 2)。DRM 課題の結果、正再生率は .52、正再認率は .89、虚再生率は .30、虚再認率は .78 であった (Figure 3)。相関分析の結果 (Table 6)、.30 以上の相関が認められたものをまと

めると以下ようになった。DRM 課題の虚再生率や虚再認率は、P 体験または N 体験の P 評価および N 評価とは有意な相関は認められず、虚再生率と P 体験の A に正の相関、外向性にと負の相関が認められたのみであった。一方、正再生率は P 体験の F および I と正の相関が認められた。

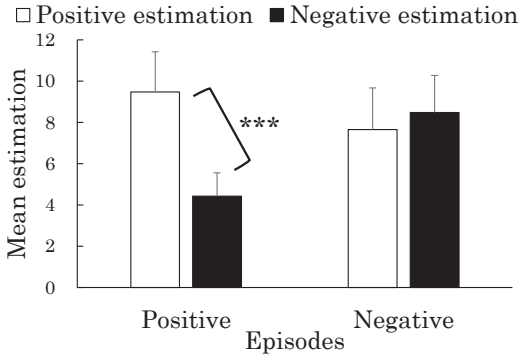


Figure 2. Positive and negative evaluation for episodes (***: $p < .001$; $N=40$).

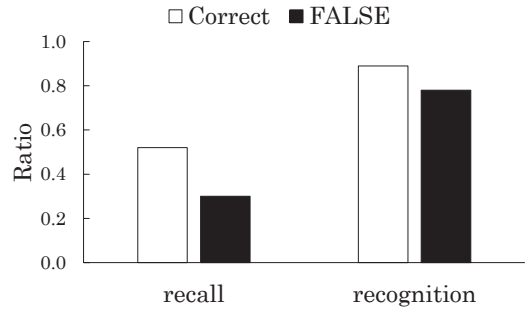


Figure 3. False recall ratio and false recognition ratio in the experiment ($N=40$) by DRM paradigm.

Table 6 Correlation between estimation of recalled episodes and recall and recognition of the DRM paradigm.

	DRM paradigm			
	%Correct recall	%False recall	%Correct recognition	%False recognition
Positive experience				
Positive estimation	.140	-.203	.074	-.131
Negative estimation	-.095	.043	-.150	.049
Degree (D)	-.110	.044	.112	.093
Frequency (F)	.324*	.108	.124	-.045
Emotional intensity (I)	.300 [†]	.232	-.005	.031
Accessability (A)	.235	.365*	-.001	.138
Negative experience				
Positive estimation	-.025	.104	.179	.142
Negative estimation	-.044	.082	-.231	-.075
Degree (D)	.290	.067	.146	-.133
Frequency (F)	.075	.084	-.358*	-.042
Emotional intensity (I)	-.243	.103	-.309 [†]	.103
Accessability (A)	-.071	-.029	-.093	.004

Note: $N=40$; [†] $p < .10$; * $p < .05$.

考察

本研究は、二つの目的のために行われた。第一の目的は、情動的な自伝的エピソード記憶を想起する際に、個人が自伝的記憶を再構成しているかどうか、すなわちポジティブ・バイアスや FAB を示すかどうかを検討し、また再構成の個人差を自尊感情、主観的幸福感、自伝的記憶の機能、性格特性との関連において検討することである。第二の目的は、情動的な自伝的エピソード記憶の再構成は、DRM パラダイムによる連想記憶エラーとは関連が低いという仮説を検討することである。

情動的自伝的記憶の想起と評価については、調査参加者のデータからは肯定的体験の想起では P 評価、否定的体験では N 評価がそれぞれ高いが、肯定的体験の場合には、明らかに P 評価が高く N 評価が低いのに比べ、否定的体験では評価の差が小さいことが示され、実験参加者のデータからは否定的体験では評価の差はないことが示された。つまり、否定的体験については、P 評価も行っていることが示されたと言える。また相関分析からは、肯定的体験では、感情強度 (I) と P 評価に強い相関、反対に否定的な評価とは負の相関が認められ、FAB が示されたと考えられる。FAB やポジティブ・バイアスについては、高齢者の方が若齢者よりも顕著に示すことが知られており、この年齢差は感情調節の方略において高齢者の方が否定的体験について肯定的な再評価を行う傾向に起因するとしている (Mather & Carstensen, 2005)。本研究は大学生を対象に行われたが、今後はより広範囲な年代にわたっての調査を行うことや、感情調節方略との関連を検討する必要があると考える。また本研究では、否定的体験への P 評価と否定的な体験への想起頻度の間に有意な正の相関がみとめられ、否定的な体験の想起頻度が多い個人はその体験に肯定的評価をする傾向が示唆される。池田・仁平 (2009) は、ネガティブな体験を肯定的に語りなおす (retelling) ことにより自伝的記憶が変容し、肯定的な感情表現が増加することを示しているが、本研究の結果から、否定的体験を肯定的に変容させる方略、つまり語り直し方略を積極的に使用できるかどうかの個人差があることが示唆されるが、この点に関しては今後詳細に検討する必要がある。

個人の特性についての検討では、以下の4点が明

らかになった。第一に、P 体験については P 評価と自尊感情や外向性に正の相関、N 評価と自尊感情や外向性との間に負の相関が認められたことから、自尊感情の高さや外向性の高さが肯定的な感情を伴う記憶の想起とその評価に関連することが示された。自尊感情は、程度、想起頻度、感情強度およびアクセスのしやすさとは相関がないが、肯定的体験における肯定的評価とは相関が示されたことから、望ましい自己像の維持のために肯定的体験を想起し、肯定的な自伝的記憶が詳細になるという傾向 (D'Argenbeau & Van der Linden, 2008) や、自尊感情の高い者は低い者より失敗の自伝的記憶を鮮明に思い出さない傾向 (関口 b, 2012) に一致する結果であると考えられる。

第二に、性格特性については、外向性と肯定的体験における諸尺度 (程度、頻度、肯定的評価、否定的評価) にのみ相関が認められたことは、外向性が肯定的体験の想起傾向に関連していることを示している。自伝的記憶の想起時の主観的特性の個人差は、外向性および開放性、特に感情に関連するパーソナリティ特性と関連していると言われる (Rubin & Siegler, 2004)。本研究の結果は、情動的な自伝的記憶全般ではなく、特に肯定的な感情を伴う自伝的記憶の想起と外向性との関連があることを示したと考える。また、落合・小口 (2013) では、TALE の下位尺度のうち行動方向付け機能と情緒不安定性に正の相関が報告されており、本研究でも、肯定的な記憶についての肯定的または否定的評価との関連が予測されたが、本研究では、情緒不安定性については、無相関であった。

第三に、TALE との関連においては、自己機能と否定的体験への肯定的評価との間に正の相関が認められ、自己の連続性や一貫性を支え、望ましい自己像の維持に役立てるという、自己継続するために想起するという自己機能が否定的体験を肯定的に評価することと関連することが示された。

第四に、主観的 well-being のうち人生の目的、環境制御力、他者との肯定的な関係についても自尊感情や外向性と同様の傾向を示し、心理的 well-being の維持と肯定的な感情を伴う自伝的エピソードの想起との関連が示された。自己定義的記憶 (self-defining memory) の想起では、主観的特性の個人差は、パーソナリティ特性と主観的幸福感や達成動機との間の媒介変数として機能し、特に情緒不安定

性と誠実性が関連することが示されている (Sutin, 2008)。本研究では評価についてのみ検討したが、情動的自伝的記憶の主観的特性と心理的 well-being の維持と性格特性の関連については今後検討することが必要であろう。

DRM パラダイムによる連想記憶エラーについては、虚再生率および虚再認率と肯定的体験に対する N 評価又は否定的体験に対する体験 P 評価のいずれにも有意な相関は認められず、関連が低いという仮説は支持されたと考える。虚再生と正の相関が示されたのは、肯定的な体験の想起へのアクセスのしやすさ (A) のみであった。これらのことから、情動的な自伝的記憶の再構成と DRM パラダイムで測定する連想記憶エラーとの関連が低いが、肯定的な自伝的記憶の思い出しやすさの傾向とは関連があることが示唆される。本研究では、情動的な自伝的記憶への自己評価と DRM パラダイムによる連想記憶エラーの観点から、自伝的記憶の再構成と連想記憶エラーが共通の認知過程であるかどうかを検討したが、相関分析に止まり、不明な点が多い。今後は共通する認知過程を検討する研究方法を精査することや、神経学的に共通する神経基盤を持つかどうかという観点からの研究 (詳しくは、Schacter, Guerin & St. Jacques, 2011; Schacter, 2012) も必要があると考えらる。

引用文献

- Bluck, S. & Alea, N. (2011). Crafting the TALE: Construction of a measure to assess the functions of autobiographical remembering. *Memory, 19*, 470-486.
- Bluck, S., Alea, N., Habermas, T. & Rubin, D.C. (2005). A tale of three functions: The self-reported uses of autobiographical memory. *Social Cognition, 23*, 91-117.
- Byre, Hyman, Jr. & Scott, (2001). Comparisons of memories for traumatic events and other experiences. *Applied Cognitive Psychology, 15*, 119-133.
- Clancy, S.A., Schacter, D.L., McNally, R.J. & Pitman, R.K. (2000). False recognition in women reporting recovered memories of sexual abuse. *Psychological Science, 11*, 26-31.
- Clancy, S. A., McNally, R. J., Schacter, D. L., Lenzenweger, M. F. & Pitman, R. K. (2002). Memory distortion in people reporting abduction by aliens. *Journal of Abnormal Psychology, 111*, 455-461.
- D'Argembeau, A. & Van der Linden, M. (2008). Remembering pride and shame: self-enhancement and the phenomenology of autobiographical memory. *Memory, 16*, 538-547.
- Deese, J. (1959). On the prediction of occurrence of particular verbal intrusions in immediate recall. *Journal of Experimental Psychology, 58*, 17-22.
- Gallo, D.A. (2010). False memories and fantastic beliefs: 15 years of the DRM illusion. *Memory & Cognition, 38*, 833-848.
- Hunt, K. & Chittka, L. (2014). False memory susceptibility is correlated with categorisation ability in humans [version 2; referees: 2 approved]. *F1000Research, 3*, 154.
- 池田和浩・仁平義明 (2009). ネガティブな体験の肯定的な語り直しによる自伝的記憶の変容 心理学研究, 79, 481-489.
- (Ikeda, K. & Nihei, Y. (2009). Retelling harsh days as being happy: Its effects on autobiographical memories. *Japanese Journal of Psychology, 79*, 481-489.)
- Loftus, E.F. & Palmer, J.C. (1974). Reconstruction of automobile destruction: An example of the interaction between language and memory. *Verbal Learning and Verbal Behavior, 13*, 585-589.
- Loftus, E.F. (2004). Memories of things unseen. *Current Directions in Psychological Science, 13*, 145-147.
- Loftus, E.F. (1997). Creating false memories. *Scientific American, 277*, 70-75.
- Mather, M. & Carstensen, L.L. (2005). Aging and motivated cognition: the positivity effect in attention and memory. *Trends in Cognitive Sciences, 9*, 496-502.
- 宮地弥生・山祐嗣 (2002). 高い確率で虚記憶を生成する DRM パラダイムのための日本語リストの作成 基礎心理学研究, 21, 21-26.
- (Miyaji, Y. & Yama, H. (2002). Making Japanese lists which induce false memory at high probability for the DRM paradigm. *Japanese Journal of Psychonomic Science, 21*, 21-26.)
- 鍋田智広・楠見孝 (2009). Deese-Roediger-McDermott (DRM) 手続きを用いた虚偽記憶研究—虚偽記憶の発生過程と主観的想起経験—心理学評論, 52, 545-575.
- (Nabeta, T. & Kusumi, T. (2007). False memories in the Deese-Roediger McDermott (DRM) paradigm: Selective review of the production mechanism and phenomenology. *Japanese Psychological Research, 52*, 545-575.)
- 並川努・谷伊織・脇田貴文・熊谷龍一・中根愛・野口裕之 (2012). Big Five 尺度短縮版の開発と信頼性と妥当

- 性の検討 心理学研究, 83, 91-99.
- (Namikawa, T., Tani, I., Wakita, T., Kumagai, R., Nakane, A. & Noguchi, H. (2012). Development of a short form of the Japanese Big- Five Scale, and a test of its reliability and validity. *Japanese Journal of Psychology*, 83, 91-99.)
- 西田裕紀子 (2000). 成人女性の多様なライフスタイルと心理的 Well-being に関する研究 教育心理学研究, 48, 433-443.
- (Nishida, Y. (2000). Diverse life-styles and psychological well-being in adult women. *The Japanese Journal of Educational Psychology*, 48, 433-443.)
- 落合勉・小口孝司 (2013). 日本語版 TALE の作成および信頼性・妥当性の検討 心理学研究, 84, 508-514.
- (Ochiai, T. & Oguchi, T. (2013). Development of a Japanese version of the TALE Scale. *Japanese Journal of Psychology*, 84, 508-514.)
- Ost, J., Blank, H., Davies, J., Jones, G., Lambert, K., & Salmon, K. (2013). False Memory ≠ False Memory: DRM Errors Are Unrelated to the Misinformation Effect. *PLOS ONE*, 8, e57939.
- Platt, R. D., Lacey, S. C., Iobst, A. D., & Finkelman, D. (1998). Absorption, dissociation, and fantasy-proneness as predictors of memory distortion in autobiographical and laboratory-generated memories. *Applied Cognitive Psychology*, 12, S77- S89.
- Ritchie, T.D., Batteson, T.J., Bohncd, A., Crawford, M.T., Ferguson, G.V., Schrauf, R.W., Vogl, R.J. & Walker, W. B. (2015). A pancultural perspective on the fading affect bias in autobiographical memory. *Memory*, 278-290
- Roediger, H. L., III, & McDermott, K. B. (1995). Creating false memories: Remembering words not presented in lists. *Journal of Experimental Psychology: Learning, Memory, & Cognition*, 21, 803-814.
- Rubin, D.C. & Siegler, I.C. (2004). *Applied Cognitive Psychology*, 18, 913-930.
- Ryff, C.D. (1989). Happiness is everything, or is it? Explorations on the meaning of psychological well-being. *Journal of Personality and Social Psychology*, 57, 1069-1081.
- Schacter, D.L. (2012). Constructive memory: past and future. *Dialogues in Clinical Neuroscience*, 14, 7-18.
- Schacter, D.L., Guerin, S.A. & St. Jacques, P.L. (2011). Memory distortion: an adaptive perspective. *Trends in Cognitive Sciences*, 15, 467-474.
- 関口理久子 (2012a) 自伝的エピソード記憶想起に伴う主観的特性と感情の関係について—自伝的記憶の主観的特性質問紙を用いた検討— 関西大学心理学研究, 3, 15-26.
- (Sekiguchi, R. (2012). Relationship between subjective properties associated with remembering autobiographical episodic memories, and emotion: Investigation by the subjective properties questionnaire of autobiographical memory. *Kansai University Psychological Research*, 3, 15-26.)
- 関口理久子 (2012b). 自己・他者評価の自伝的記憶と自尊感情・対人不安の個人差との関連 日本心理学会第76回大会発表論文集, 1PMA46.
- (Sekiguchi, R. (2012). Relationship between memories estimated by self or others and individual differences of self-esteem and interpersonal anxiety: Investigation by the subjective properties questionnaire of autobiographical memory. *Proceedings of the 76th Annual Convention of the Japanese Psychological Association*, 1PMA46.)
- Sutin, A. (2008). Autobiographical memory as a dynamic process: Autobiographical memory mediates basic tendencies and characteristic adaptations. *Journal of Research in Personality*, 42, 1060-1066.
- 和田さゆり (1996). 性格特性用語を用いた Big Five 尺度の作成 心理学研究, 67, 61-67.
- (Wada, S. (1996). Construction of the Big Five Scales of personality trait terms and concurrent validity with NPI. *The Japanese journal of psychology*, 67, 61-67.)
- Walker, W.R., Skowronski, J.J. & Thompson, C.P. (2003). Life is pleasant — and memory helps to keep it that way! *Review of General Psychology*, 7, 203-210.
- Wilkinson, C., & Hyman, I. E., Jr. (1998). Individual differences related to two types of memory errors: Word lists may not generalize to autobiographical memory. *Applied Cognitive Psychology*, 12, S29- S46.
- 山本真理子・松井 豊・山成由起子 (1982). 認知された自己の諸側面の構造 教育心理学研究, 30, 64-69.
- (Yamamoto, M., Matsui, Y. & Ymanari, Y. (1982). The Structure of Perceived Aspects of Self. *The Japanese Journal of Educational Psychology*, 30, 64-68.)
- 関口理久子 (2012a) 自伝的エピソード記憶想起に伴う主観的特性と感情の関係について—自伝的記憶の主観的特性質問紙を用いた検討— 関西大学心理学研究,